様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年　３月３１日現在

研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2006～2008
課題番号：１８７２０１９２
研究課題名（和文）　碑刻史料等の分析による金元代華北における地方文書行政と地域社会の相互関係の研究
研究課題名（英文）　A Study on the Mutual Relationship between the Administration by Official Documents and Local Society in Jin - Yuan Huabei: With Special Reference to the Inscriptions

研究代表者　　舩田　善之　（FUNADA　YOSHIYUKI）
九州大学・大学院人文科学研究院・講師
研究者番号：５０４０４０４１

研究成果の概要：

本研究では、金元代（12～14 世紀）における中国華北地域（おおよそ現在の河北・河南・山東・山西・陝西）を対象として、地方文書行政と地域社会の相互関係を考察した。文献調査と現地調査によって関連の碑刻史料（石碑）を収集・整理し、典籍史料・文書史料と併せて分析を加え、地方文書行政による統治情報伝達の構造、公文書とその碑刻化（石碑として立てること）が地域社会へ与えた影響を解明した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,300,000	0	1,300,000
2007 年度	1,100,000	0	1,100,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	2,900,000	150,000	3,050,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・東洋史
キーワード：東アジア史・金元史・モンゴル・華北・碑刻・石刻・文書行政・地域社会

１．研究開始当初の背景

(1)学界動向と研究代表者のこれまでの研究

昨今、モンゴル時代史研究（元代史研究・モンゴル帝国史研究）が盛んであることが、各種の学界展望で指摘されている。しかしながら、その前後の宋代史研究や明清史研究と比較すると、研究者の絶対数が少なく、少数の研究者が特定の分野（政治史・軍事史・文化史）において突出した成果を出しているというのが偽らざる現状である。こうした現状に鑑みれば、地方行政や社会史が当該時代の重要な課題であることは疑いを容れない。

研究代表者は、これまで、モンゴル時代の文書行政システム研究に取り組んでおり、その過程で、文書行政システム研究が、地方行政や地域社会の実態の解明につながることを認識するに至った。

さて、中国近世史という長期的・脱断代史的なスパンからみた場合、華北地域に関する研究蓄積は極めて乏しい。こうした状況は、従前から指摘されており、その原因として史料的な制約が挙げられてきた。実際、中国史における地域社会研究の重点は、江南地域に置かれている。しかしながら、モンゴル時代

及びそれに先立つ時代を見据えた場合、華北こそが北方民族の活動・流入という歴史上の大きなインパクトを受けた事実に注目しなければならない。この移行期において、華北地域は大きく変容したのである。江南地域に偏っている現状に対する反省と当該時代における華北地域の重要性から、当該時期の華北研究を展開させる必要性は大きい。

(2)史料状況の変化

幸いなことに、中国近世の華北に関する史料状況については、変化をみせつつある。すなわち、碑刻史料（石刻史料）の利用が盛んになっている趨勢である。この変化は、いくつかの段階を経ており、また利用する史料の形態によってもいくつかに分類することができる。形態は大きく分類して、録文と原史料に分けられる。当然のこととして、碑刻史料を取り扱う場合、原史料にあたることが不可欠となる。すなわち、原碑ないし、あるいは準原史料としての拓本である。これらの史料をめぐる環境は近年大きく変化した。録文・原史料の状況について、以下便宜的に七点に分けて説明する。

第一には、いわゆる石刻書の影印（『石刻史料新編』など）の刊行である（1980 年頃～現在）。これによって、ほとんどの研究者が、碑刻史料の録文を利用することにおいては、ほぼ同様の史料環境を取得することとなった。

第二に、地方志の影印の刊行である（1970 年代～現在）。代表的なシリーズとして 1970 年代に台湾から《中国方志叢書》が刊行され、現在では中華人民共和国から《中国地方志集成》が刊行中である。これによって、碑刻史料の録文の確認がより容易になっただけではなく、未知の碑刻史料の発掘の可能性が高まることとなった。

第三に、中国の地方の研究機関・研究者の活動により、碑刻史料録文集の刊行が活発になったことである（1990 年代後半～現在）。これによって未知の、あるいは広く知られていなかった碑刻史料が多く紹介された。

第四に、拓本を影印した史料集の刊行である（1990 年頃～現在）。これによって、碑刻史料を活用した研究は、二次史料を利用した研究から、一次史料を利用した研究へと発展した。そして、真の碑刻史料研究を行う条件が整ったといえる。

第五に、拓本所蔵機関における史料閲覧が比較的に容易になったこと（中国では 2000 年頃から）、さらに各所蔵機関がインターネット上において拓本の影印を公開するようになったこと（2003 年頃から）が挙げられる。

第六に、第三の状況と平行する形で、原碑の影印が史料集を始めとする様々な書籍に掲載されるようになったことが指摘できる。

そして、最後に、中国の改革開放にともない、原碑の現地調査が容易になったこと（1980 年頃から、本格化するのは 2000 年頃から）を挙げなければならない。

(3)研究開始当初の展望

研究代表者は、こうした状況において、2000 年から碑刻史料の収集･調査を開始し、その研究に従事してきた。そして、2003 年から 2005 年において、碑刻史料を活用した文書行政システムの研究を実施し、関連の論文を発表してきた。この研究過程において、碑刻史料を活用して、中国華北における地方文書行政と地域社会の研究に展望を見いだした次第である。

２．研究の目的

本研究では、金元代（12～14 世紀）における中国華北地域（おおよそ現在の河北・河南・山東・山西・陝西）を対象として、地方文書行政と地域社会の相互関係に焦点をあてる。その上で、研究代表者がこれまで行ってきた、文書行政を中心とする統治システム研究と現地碑刻調査の成果を基礎として、地方文書行政の運用の実態、ならびに地方文書行政の地域社会に対する関与、それに対する社会の対応、以上から抽出できる地域社会の状況を明らかにすることを目的とする。

具体的には、公文書を刻した碑刻史料を第一の基本史料と位置づけ、その収集・整理と解読・分析を行う。その上で、主に次の三点に焦点をしぼって研究を進める。第一に、モンゴル語などの命令文を漢語に翻訳するために用いられた独特の翻訳文体「蒙文直訳体」の起源・成立・展開・影響について考察する。かかるモンゴル語の構造を強く保持する翻訳方式を採用した背景や、この文体の登場が翻訳担当者や受容者に与えた影響を検討する。第二に、文書行政の末端において、統治情報がどのように地域社会に伝達されたのかについて考察を加える。第三に、公文書の伝達とその碑刻化、及びこれらが地域社会に与えた影響について考察する。公文書を碑刻に刻む習慣の普及状況や碑刻化という行為そのものの意味を考えつつ、公文書の伝達とそれが碑刻として立てられた事実が、地域社会の中核となる地方官僚・宗教勢力とどのような関わりをもっているのか、そして彼らにどのような行動をとらせたのかについて、具体的な事例を押さえつつ、検討する。以上を通じて、文書行政システムを政権と民衆とをつなぐ結節点に位置づけ、華北地域社会の実態の一端に迫ることを目指したい。

３．研究の方法

(1)研究対象地の選定

本研究では、金元代の華北地域社会を研究対象とする。しかしながら、三年の研究期間で華北全域をカバーすることは不可能である。また、「華北」は自明の地域区分としてしばしば口上にのぼるが、つまるところ、「江南」と対比した地域区分に過ぎない。研究代表者は、これまでの現地調査・文献調査を通じて、華北各地域間の差異を強く認識しており、大きな留意を払うべきと考えている。したがって、本計画においては、研究対象を一つの小地域に限定せず、複数の小地域を抽出して重点調査対象地と位置づけ、調査・研究を推進した。

研究対象地の選定においては、以下の条件を考慮した。第一に、これまでの文献調査によって、有用な史料が得られる見通しがついていること。第二に、山西省は、碑刻史料の残存密度が高く、高質の指針となる叢書《三晋石刻総目》が刊行されている点。第三に、《中国地方志集成》という旧地方志の影印の集成の刊行状況。華北地域のシリーズは、華中・華南地域に比べ、刊行が遅れていたが、2004 年・2005 年になってようやく山東・山西のシリーズがそれぞれ刊行された。第四に、研究期間中に、《中国文物地図集》の山西分冊・山東分冊の刊行が予定されていた点。第五に、山西省の《三晋石刻総目》の網羅性には劣るが、陝西省の《陝西金石匯集》も有用であり、情報は古くなっているが、すでに『中国文物地図集・陝西分冊』が刊行されていること。第六に、調査対象地の交通事情と地勢。第七に、成果公表のため、現地で開催される国際会議に参加する場合、その開催地からのアクセス。これは、現地調査と成果公表を効率よく実施するためである。

以上の諸条件を踏まえ、山西省運城市一帯～陝西省韓城市一帯、甘粛省蘭州市一帯・平涼市一帯～寧夏回族自治区銀川市・固原市一帯～陝西省咸陽市一帯・西安市一帯、山西省陽泉市一帯・晋中市一帯、山東省煙台市一帯・濰坊市一帯を調査対象地として選定した。

(2)碑刻史料（文献史料の録文その他の情報、拓影・碑影、現状に関する情報）の収集と調査・整理

九州大学附属図書館所蔵史料、研究代表者がこれまで収集してきた史料に加えて、本研究課題によって収集した文献史料によって、前項(1)の研究対象地を中心に、金元代華北における碑刻史料の調査・整理を行った。

①『石刻史料新編』の調査

まず、金元代華北碑刻史料の総体的な状況と調査対象地における碑刻史料の量・質の偏差・特徴を把握するために、碑刻史料の基本史料を集成した『石刻史料新編』を調査した。

②旧地方志史料の調査

次に、『中国地方志集成・山東府県輯』・『中国地方志集成・山西府県輯』に影印が所収されるものを始めとして、調査対象地の各種歴代地方志を調査し、過去に存在した金元代碑刻史料とその変遷を把握し、同時に録文の収集・整理を行った。

③新地方志・目録類・碑刻史料集の調査

その上で、新地方志や文物志、『三晋石刻総目・運城市巻』・『三晋石刻総目・陽泉市巻』・『三晋石刻総目・晋中市巻』・『中国文物地図集・陝西分冊』・『中国文物地図集・山西分冊』・『中国文物地図集・山東分冊』、及び《陝西金石匯集》シリーズの・『咸陽碑石』・『咸陽碑刻』、『蘭州古今碑刻』・『西北民族碑文』・『山西戯曲碑刻輯考』・『晋中碑刻選粋』・『河東塩池碑匯』など単行の碑刻史料集によって、当該地域の金元碑刻史料の現状の把握を行った。如上の碑刻史料目録・文物単位集成・史料集のほか、『中国考古学年鑑』（1984～2006 年）・『文物 500 期総目索引』及び各種の考古報告、『山西名勝旅游大辞典』・『甘粛古迹名勝詞典』・『山西旅游 980 景点』・『500 景点旅遍陝西』・『山東寺廟塔窟』・『甘粛窟塔寺廟』などの名勝・史跡に関する書籍やインターネットの情報も平行して調査することにより、碑刻の現状に関する情報の精度を高くすることに努めた。この作業は、碑刻が現存している史跡の把握にもつながり、現地調査の準備になるばかりではなく、碑刻が存在している空間まで含めて総合的に碑刻を把握する下地を得ることにもつながる。

④拓影・碑影史料集の調査

さらに、『新中国出土墓誌』の陝西分巻、『北京図書館蔵中国歴代拓本匯編』（全 101 冊）・『山西碑碣』・『陝西碑石精華』などによって、公開・影印されている調査対象地の金元碑刻史料の収集・調査・整理を完了させた。

(3)碑刻史料の調査・収集（現地調査）

本課題の研究期間内に、四回の現地調査を行った。アクセス可能な金元碑刻について、現状を確認し、実物に基づいて調査を実施した。同時に、これら碑刻をとりまく史跡・建築の実見調査も平行して行い、碑刻とそれが現存する場を総合的に理解するための基盤構築にも注意を払った。また史跡のリーフレットなど日本では入手できないが、貴重な情報を掲載する関連資料も収集した。訪問地点などの詳細は、それぞれ下記の通りである。

①山西省運城市、陝西省韓城市一帯の調査

2006 年 8 月 24 日から 9 月 7 日まで、中国山西省運城市・臨猗県・芮城県・永済市・河津市・稷山県・新絳県・万栄県、陝西省韓城市・郃陽県・西安市の博物館・寺廟・史跡などにおいて、碑刻史料と関連史跡の現地調査を行った。訪問機関・地点は、運城市文物局・運城市博物館［関王廟］・池神廟［河東塩業博物館］・河東博物館・五嶽廟・連三舞台・

清涼寺・純陽宮［永楽宮旧址］・芮城県博物館［城隍廟］・永楽宮・万固寺・普救寺・古垛后土廟・真武廟・稷山県博物館［青龍寺］・山西金墓博物館・稷王廟・大仏寺・新絳県博物館［龍興寺］・絳州文廟・稷王廟・万栄県博物館［東嶽廟・飛雲楼］・后土祠・韓城市博物館［文廟］・司馬遷祠・大禹廟・元代建築博物館［普照寺］・金塔公園・光国寺址・陝西歴史博物館などである。この過程で、李百勤氏（山西省運城市文物局副局長）・李竹林氏（河東塩業博物館館長）・呉鈞氏（河東博物館）を始めとする現地の関係者の方々の協力により、およそ 90 件の金元碑を実見・調査することができた。

②甘粛省蘭州市・平涼市一帯、寧夏回族自治区銀川市・固原市一帯、陝西省咸陽市・西安市一帯の調査

国際会議「成吉思汗与六盤山国際学術研討会」に出席し、本課題の成果を報告することとなり、その前後を現地調査に充てることとした。2007 年 7 月 15 日から 29 日まで、中国寧夏回族自治区銀川市・固原市・涇源県、甘粛省蘭州市・臨洮県・平涼市・涇川県、陝西省永寿県・乾県・周至県・西安市の博物館・寺廟・史跡などにおいて、碑刻史料と関連史跡の現地調査を行った。訪問機関・地点は、国際会議のエクスカーションを含め、寧夏大学・西夏王陵・西夏博物館・寧夏回族自治区博物館・甘粛省古籍文献整理編訳中心・蘭州市博物館・甘粛省博物館・宝塔寺・開城遺跡・固原市博物館・宝塔博物園・涇川県博物館［城隍廟］・王母宮・呉山寺・乾陵・趙后廟・洪教院・楼観台［崇聖宮・説教台］・丹陽観・西安博物院などである。この過程で、杜建録氏（寧夏大学教授）・賀吉徳氏（銀川市賀蘭山岩画管理処主任）・高国祥氏（甘粛省古籍文献整理編訳中心）ならびに国際会議主催者を始めとする現地の関係者の方々の協力により、およそ 20 件の金元碑を実見・調査することができた。

③山西省陽泉市・晋中市・太原市一帯の調査

2007 年 8 月 31 日から 9 月 11 日まで、中国山西省寿陽県・盂県・陽泉市・平定県・昔陽県・和順県・左権県・楡社県・太谷県・太原市・古交市の博物館・寺廟・史跡などにおいて、碑刻史料と関連史跡の現地調査を行った。訪問機関・地点は、松羅院・福田寺・龍泉寺・龍神廟・五道廟・雲中閣址・李荘村蔵山祠・龍王廟・寿聖寺・五盗廟・馬歯岩寺・石門寺・離相寺・邢村聖母廟・懿済聖母廟・湧泉院址・昭懿聖母廟・楡社化石博物館・崇聖寺・無辺寺白塔・黨大夫祠・山西省博物院・龍山石窟などである。

この過程で、井黒忍（日本学術振興会特別研究員・山西大学訪問学者）ならびに現地の関係者の方々の協力により、およそ 25 件の金元碑を実見・調査することができた。

④山東省煙台市・濰坊市一帯の調査

国際会議「斉魯文化与昆嵛山道教国際学術研討会」に出席し、本課題の成果を報告することとなり、会議終了後に現地調査を行うこととした。2008 年 10 月 8 日から 15 日まで、山東省煙台市牟平区・濰坊市・臨朐県・平度市の博物館・寺廟・史跡などにおいて、碑刻史料と関連史跡の現地調査を行った。訪問機関・地点は、国際会議のエクスカーションを含め、張顔山故居・范園［玄都宮址］・雷神廟・神清観・唐四仙姑祠堂跡・嶽姑殿・一孔橋・十笏園博物館・東鎮廟・崔世栄墓・智蔵寺墓塔林・千仏飛閣などである。劉学雷氏（山東牟平全真文化研究中心）・趙衛東氏（山東師範大学）を始めとする現地の関係者の方々の協力により、およそ 10 件の金元碑を実見・調査することができた。

(4)本課題に必要な典籍史料・文書史料の収集

本課題の中心史料は碑刻史料であるが、当然のこととして、典籍史料・文書史料も併用し、総合的に検討する必要がある。文書行政や地域社会に関する記述を典籍史料・文書史料から抽出する作業を行った。

(5)収集史料の整理・解読・分析

前項(3)で収集した史料とその情報を整理し、前項(2)の作業成果とつきあわせつつ、現存を確認した金元碑のデータベースを作成した。その上で、前項(2)(3)によって収集された碑刻史料、及び前項(4)で抽出した関連の典籍史料・文書史料のうち、本課題に関わりの深いものについて、解読・釈読を行い、分析を加えた。

(6)本課題の研究テーマについての考察

「「蒙文直訳体」公文書とその起源・影響」「公文書の地域社会における伝達」「公文書の碑刻化とその地域社会に対する影響」について考察を行った。また、本課題に関連する諸問題や特定の碑刻史料・文書史料についても平行して分析・検討を進めた。その詳細については、次項「４．研究成果」に記述している。

４．研究成果

(1)「蒙文直訳体」公文書とその起源・影響に関する考察

モンゴル時代（元代）の公文書を刻した碑刻史料のうち、極めて重要な価値を有する史料群として、蒙文直訳体の碑刻（いわゆる「白話碑」）がある。これらの多くは、モンゴルの統治層であるハーン（皇帝）を始め、皇太后・皇后・皇太子・諸王・公主・駙馬・帝師・国師・将相がモンゴル語（一部チベット語）で発令した命令文（漢語では聖旨・懿旨・令旨・法旨・鈞旨）が、原語の構造を一定程度

保持した形で漢語に直訳されたものである。また、こうした命令文の権威を踏まえて、中央官庁・地方官庁が発給した公文書も存在する。こうした碑刻史料には、原語のモンゴル語（ウイグル文字あるいはパスパ文字）やチベット語と合刻されたもの、各種文字（ウイグル文字・パスパ文字・アラビア文字）の添え書きが附されたものも含まれる。

これら史料群は、モンゴル時代史（元代史）研究における一級史料であり、その集成・整理・釈読、言語学・史料学研究、歴史学への活用がなされてきた。しかしながら、「蒙文直訳体」そのものの起源・成立・展開・影響については、一部の言及を除いて十分に議論が深められていなかった。本研究においては、まず関連の文献史料から「蒙文直訳体」の起源・成立の背景を解明した（雑誌論文⑤・学会発表⑩）。すなわち、モンゴル政権が「蒙文直訳体」を採用したのは、翻訳過程による改変を避けることが目的であった。そして、このことはハーンの命令を神聖視していたことと密接に関連する。

そして、新出碑刻史料により、その展開の過渡期を発見・抽出し、それをもとに、「蒙文直訳体」の出現が翻訳者や受容者に与えた影響について考察した（雑誌論文⑥・学会発表④⑨）。従来一気呵成になされたとみなされていた「蒙文直訳体」の定型化にも、一定の過渡期が存在しており、それには、漢語の規範が干渉していたことを明らかにした。

また、「蒙文直訳体」の碑刻史料について、多数の新出史料を踏まえ、その形式について総合的に整理・考察した（雑誌論文⑧）。

(2)公文書の地域社会における伝達に関する考察

典籍史料・文書史料・碑刻史料を総合的に考察し、公文書が地方においてどのように伝達され、それが地域社会にどのような影響を与えたかについて検討した（学会発表⑦）。金代の制度とそれを継承したモンゴル（元）の制度における、地方官庁での公文書伝達とその手順・処理について解明した。そして、ハーン（皇帝）の命令文については、その伝達・宣読が、官の世界のみならず、都市住民も巻き込んだ形で挙行されるセレモニーであったことを指摘した。

(3)公文書の碑刻化とその地域社会に対する影響の考察

「西安清真寺洪武 25 年聖旨碑」の検討を通じて、モンゴルの宗教教団への命令文書発給とその碑刻化に関する問題を、イスラームの事例を通じて考察した（学会発表⑥・図書④）。これによりモンゴル時代（元代）に隆盛する命令文書の碑刻化現象が、元末明初に至ってイスラームにも波及したことを明らかにした。

また、山東牟平の碑刻史料の検討を通じて、モンゴル諸王の命令文書の碑刻化が契機となって、官僚・道士を巻き込む形で、地域社会の一大イベントである、聖人の遷葬や祠廟・道観・橋梁の創建・重修が挙行・実施されたことが明らかとなった（学会発表①③）。

(4)その他公文書史料・碑刻史料を活用した研究

本課題で推進した典籍史料・碑刻史料・文書史料の収集・整理・分析により、文書行政・地域社会に関する様々な成果を得ることができた。まず、モンゴルの日本宛外交文書の検討やモンゴル・日本間の外交交渉の研究にも、碑刻史料の分析から得られる知見が有用であることを提示した（雑誌論文①・学会発表②⑤・図書①）。また、本課題における碑刻史料分析の成果は、ハラホト出土モンゴル文書の解読・釈読・研究に裨益した（図書②）。

(5)総括

以上、本課題を通じて、金元代、とくにモンゴル時代の碑刻史料の収集・整理が大幅に進展し、重要な研究基盤を構築することができた。そして、碑刻史料を中心とした分析により、地方文書行政と地域社会の相互関係について、(1)～(4)でまとめたように、新たな知見を得ることができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計９件）

① 船田善之、「日本宛外交文書からみた大モンゴル国の文書形式の展開―冒頭定型句の過渡期的表現を中心に―」、『史淵』、第 146 輯、1-23 頁、2009 年、査読無
https://qir.kyushu-u.ac.jp/dspace/handle/2324/13880

② 船田善之、「「成吉思汗与六盤山国際学術研討会」参加報告」、『13, 14 世紀東アジア史料通信』、第 9 号、16-18 頁、2009 年、査読無

③ 船田善之、「2007 年の歴史学界―回顧と展望―　内陸アジア―」、『史学雑誌』、第 117 編第 5 号、259-265 頁、2008 年、査読無

④ 船田善之、「中国を統治したモンゴルの二種の文字」、『言語』、第 36 巻第 10 号、38-41 頁、2007 年、査読無

⑤ 船田善之、「蒙文直訳体の成立をめぐって―モンゴル政権における公文書翻訳システムの端緒―」、『語学教育フォーラ

ム』、第 13 号、7-19 頁、2007 年、査読無

⑥ 舩田善之、「蒙文直訳体の展開―「霊巌寺聖旨碑」の事例研究―」、『内陸アジア史研究』、第 20 号、1-20 頁、2007 年、査読有

⑦ 舩田善之、「山東日照・諸城の元代碑刻の現状―碑刻現地調査の展望と課題―」、『東アジアと日本―交流と変容―』、第 4 号、11-20 頁、2007 年、査読無

⑧ 祖生利・舩田善之、「元代白話碑文的体例初探」、『中国史研究』、総第 111 期(2006 年第 3 期)、117-135 頁、2006 年、査読有

⑨ 舩田善之、「2005 年の歴史学界―回顧と展望― 東アジア 中国 五代・宋・元」、『史学雑誌』、第 115 編第 5 号、217-224 頁、2006 年、査読無

〔学会発表〕(計 10 件)

① 舩田善之、「答阿里台系諸王令旨考―兼談元代寧海地区全真道」、東亜史及其史料研究：中日高校第四次学術交流会、2009 年 3 月 14 日、中国南京市

② 舩田善之、「モンゴル帝国の至元三年(1266)の日本招諭文書の冒頭句と文書形式をめぐって」、韓日 海洋史－海洋文化 共同 Workshop「韓日 海洋史 研究의 最前線」、2008 年 11 月 27 日、韓国務安郡

③ 舩田善之、「両通寧海王令旨与蒙元時期的昆嵛山全真道」、斉魯文化与昆嵛山道教国際学術研討会、2008 年 10 月 11 日、中国煙台市

④ 舩田善之、「蒙元時期硬訳公牘文体的程式化」、慶賀蔡美彪先生八十華誕“元代民族与文化”国際学術研討会、2008 年 7 月 28 日、中国張掖市

⑤ 舩田善之、「日本宛外交文書からみたモンゴルの文書形式の展開」、平成 19 年度九州史学会大会シンポジウム、2007 年 12 月 8 日、九州大学

⑥ 舩田善之、「従《西安清真寺洪武 25 年聖旨碑》来看元明時期穆斯林的変遷」、中国蒙元史学術研討会暨方齢貴教授 90 華誕慶祝会、2007 年 8 月 7 日、中国昆明市

⑦ 舩田善之、「元代開読詔旨考」、成吉思汗与六盤山国際学術研討会、2007 年 7 月 21 日、中国固原市

⑧ 舩田善之、「モンゴル時代における民族接触とアイデンティティの諸相」、九州大学 21 世紀ＣＯＥプログラム「東アジアと日本：交流と変容」統括ワークショップ、2006 年 11 月 7 日、於九州大学

⑨ 舩田善之、「霊巌寺聖旨碑にみえる蒙文直訳体定型化の過渡期―元代文書行政システムの展開の一齣―」、2006 年度内陸アジア史学会大会、2006 年 11 月 11 日、龍谷大学

⑩ 舩田善之、「蒙文直訳体の成立をめぐって―モンゴル政権における公文書翻訳システムの端緒―」、華夷譯語研究会・東ユーラシア言語研究会第 11 回例会、2006 年 7 月 14 日、大東文化会館

〔図書〕（計４件）

① 한일문화교류기금・동북아역사재단（편）［韓日文化交流基金・東北亜歴史財団編］、舩田善之ほか 10 名共著（11 番目）、『몬골의 고려・일본 침공과 한일관계』［『モンゴルの高麗・日本侵攻と韓日関係』］、경인문화사［景仁文化社］、325 頁（235-239 頁）、2009 年

② 吉田順一・チメドドルジ編、舩田善之ほか 16 名共著（5 番目）、『ハラホト出土モンゴル文書の研究』、雄山閣、420 頁（12-182 頁）、2008 年

③ 今西裕一郎編、舩田善之ほか 15 名共著（4 番目）『九州大学 21 世紀COEプログラム「東アジアと日本：交流と変容」統括ワークショップ報告書』、九州大学大学院比較社会文化研究院、233 頁（19-29 頁）、2007 年

④ 森川哲雄・佐伯弘次編、舩田善之ほか 19 名共著（6 番目）、『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』、櫂歌書房、250 頁（65-78 頁）、2006 年

６．研究組織

(1)研究代表者

舩田 善之（FUNADA YOSHIYUKI）
九州大学・大学院人文科学研究院・講師
研究者番号：５０４０４０４１